

Philomusica Orchester Kyoto

cresc.
Ob.
mp
C.J.
mp
Cl. 1/3
mp
Fag.
mp *cresc.*
Cor. 1
p
3 Trombei
mp
Timp.
tr
VI. 1
molto espr.
VI. 2
molto espr.
Viole
mp
Vlc.
f
Cb.
mf *dim.*
mf *dim.*
FL. 1
mp cant.
1.
3.
Tramb.
ppocof
Timp.
tr
mp
Arpa
f *dim.*
Eduard Tubin (1905-1982)
La#
京都フィロムジカ管弦楽団 第17回定期演奏会 2005年6月5日
pp

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、各回毎に新しい音楽の創造に挑戦し、はや第17回目となりました。今回は、第7回演奏会に引き続きまして、指揮者に遠藤浩史氏をお迎えし、先生のご指導のもと、努力と研鑽を積み重ね、本日ここに魅力あふれる曲の数々を披露してくれるものと期待致しております。皆様にはその努力の結実を演奏の中にお聴きいただければ幸甚に存じます。また、この度は大変珍しいトゥビン作曲、交響曲第4番“叙情”が演奏されますのも、大変興味深いところです。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

「こんな作曲家がいたのか」と思うことがあります。何かの機会にその作曲家の作品を偶然耳にし、それが自分の感性に訴えたりすると、もっとこの人の作品を聴いてみたいと思うようになります。それから次々とCDを集めるようになり、気がついたらその作曲家のとりこになってしまうといった具合です。いったいどの作曲家のどの作品が誰の心にひびくのか、これは予想が付きません。きょうも一般にはまず聞くことのできない曲を演奏します。もし何か感ずるものがあればそれは私たちにとってこのうえない幸せです。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

COLORS

美容室 カラーズ

〒615-8238

京都市西京区山田車塚町3番地の3

アクシア京都1F

TEL 075-393-7379

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作

イチイヒロキ Violin Shop

～弦楽器をもっと知り、楽しむ人に～

◆イタリア、ドイツ製ヴァイオリンなど直輸入、品質には自信のある楽器や弓を良心的価格で揃えています。まずは手にとって御試奏を。

◆弦は格安価格にて通信販売。ケースその他、特価品有り、当店はただ売るだけでなく良いものをお奨めいたします。

楽器の音色の美しさ、すどさ、しなやかさ、表現の多様性から広がっていく音の世界。イチイヒロキViolin Shopはより深みのある、新鮮な音を目指して、あなたをサポートします。

営業時間：pm. 1:00 - pm. 7:00

定休日：(月・火)

◆〒602-0831 京都市上京区立本寺前町79

◆Tel: 075-251-0724

◆携帯：090-3628-0863

◆e-mail: ichii@violinshop.jp



<http://violinshop.jp>

京都フィロムジカ管弦楽団 第17回定期演奏会

京都芸術センター制作支援事業

2005年6月5日(日) 午後2時開演

1:15～ ロビーコンサート

京都府長岡京記念文化会館

— PROGRAMM —

ジュール・マスネ (1842-1912) / 管弦楽組曲第3番『劇的風景』
Jules MASSENET 《Scènes Dramatiques》 3^{eme} Suite d'orchestre
I. Prélude et Divertissement II. Mélodrame III. Scène finale

ヴィルヘルム・リヒャルト・ヴァーグナー (1813-1883) / ジークフリート牧歌
Wilhelm Richart WAGNER Siegfried - Idyll

— 休憩 —

エドゥアルド・トゥビン (1905-1982) / 交響曲第4番『叙情』
Eduard TUBIN Neljas sümfoonia 《Lüüriline》
I. Molto moderato II. Allegro con anima III. Andante un poco maestoso IV. Allegro

指揮 遠藤 浩史

携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
客席での飲食・喫煙・写真撮影・録音・録画、上演中の私語は固くお断りいたします。
補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。



合宿はもちろん、
ゼミ旅行や温泉に海外旅行
全てお任せ下さい

日本教育旅行株式会社

フリーダイヤル 0120-040-566

TEL. 075-351-0405 / FAX. 075-371-7739

HP <http://www.net-freeway.com>

e-mail: mmtmk@rmail.plala.or.jp

担当者：美馬 智子

焼き肉の
三四郎

YAKINIKU NO SANSHIRO

長岡京市長岡1丁目1-12 (駅前セブレ通り右側すぐ)

TEL 075-954-3460 FAX 075-954-0346

ロビーコンサート

ブルックナー／Locus iste (「この所は神により作られた」) (山下大介編曲)

Tp.遠藤、中西 Pos.山下、尾崎

…敬虔なカトリック教徒だったブルックナーが作曲した宗教的合唱曲を、金管四重奏に編曲してお送りします。この曲が作曲されたのは、宗教音楽の傑作「ミサ曲第3番」や初期の交響曲が作曲されていた時期にあたり、ブルックナーが円熟に向う時期の作品と言えます。小品ながら壮大な高揚感が味わえるブルックナーならではの作品です。

マルティヌー／弦楽四重奏曲第1番より第1楽章

Vn.天澤、西村浩輔 Va.大八木 Vc.多田

…チェコを代表する作曲家といえば、ドヴォルザークやスメタナが挙げられますが、マルティヌー(1890-1959)もまた彼らに匹敵する大作曲家です。第二次世界大戦でナチを嫌って渡米し、クーゼヴィツキーらの支援を受けながら活躍。晩年は西ヨーロッパで活動しました。新古典主義と民族音楽が融合した独特な作風が特徴です。弦楽四重奏曲は7曲残しましたが、どれも民族的なメロディーを中心として独特の響きとリズムを持っています。第1番はチェコ在住中の1918年に作曲された作品です。40分の大作で、時にマーラーを思わせるシンフォニックな様相を見せます。時間の関係で第1楽章しか紹介できないのが残念です。

 **太陽堂**グループ

舞鶴 宮津 小浜

事務局：舞鶴市字福来1111の2 TEL：0773(77)2710

居酒屋

ごんぱやし

京都木屋町店

京都市中京区河原町蛸薬師東入ル備前島町307
PLEXUSビル1F・2F

TEL 075-257-4775

営業時間 <日～木>午後5:00～午前0:00
<金/土/祝前日>午後5:00～午前1:00

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町通荒神口上ル二筋目東入ル

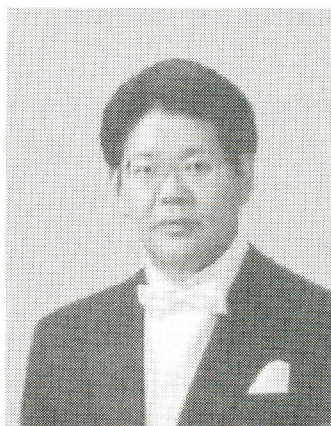
TEL (075) 231-1727(代)

FAX (075) 256-4604

遠藤 浩史 (えんどう ひろし)

大阪生まれ。大阪音楽大学ピアノ科を経て、桐朋学園大学オーケストラ指揮専攻科に学ぶ。在学中指揮を、小澤征爾、尾高忠明、秋山和慶、岡部守弘の各氏に、ピアノを山田朋子氏に、二重奏及び室内楽を、中山朋子、間宮芳生、江藤俊哉、金昌国の各氏に、作曲を、三善晃氏にそれぞれ師事。

卒業後、群馬交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、東京ニューシティー管弦楽団、東京合唱協会などに客演し、好評を博す。



1992年、南スイスのルガーノで行われた「マスタープレイヤーズ講習会」においてマスタープレイヤーズオーケストラを指揮し高い評価を得ると共に、R. シューマッハー氏により指導を受ける。1996年7月には、ソンバトヘイ（ハンガリー）で行われた国際バルトークセミナーにてファイナルコンサートの指揮者選ばれサヴァリア交響楽団を指揮し絶賛を博す。1999年8月には、ウィーンとブダペストで行われた「日独楽友協会指揮者セミナー」にてK. レーデル氏に師事。

アマチュアオーケストラや合唱団の指揮及び指導実績も多く、たくさんの音楽愛好家の方々から高く評価されている。また、エレクトーンアンサンブルによる電子オーケストラとの共演も積極的に取り組み、特にピティナピアノコンペティション協奏曲部門や東京六大学ピアノコンサートを含む各種演奏会の指揮も担当している。

また演奏頻度の少ない作曲家の作品も積極的に紹介することにも力を注ぎ、1995年にはP. マッカートニーのクラシック音楽の分野の大作「リバプール・オラトリオ」を、日本人指揮者として初めて指揮し話題を呼んだ。

1999年11月11日、若手指揮者シリーズ、「21世紀プロジェクト・第4弾」として、オーチャードホールにて新星日本交響楽団（現：東京フィルハーモニー交響楽団）を指揮し絶大なる評価を得、その模様はNHK、スカイパーフェクTVでオンエアされ、また「音楽の友」をはじめとするさまざまなメディアにて、賛嘆の記事が寄せられた。

2001年12月、創価大学で行われた第11回『第九』演奏会を指揮、圧倒的な大成功をおさめると同時に、大学側よりその功績を称えられ、同大学栄誉賞を受賞し、その後3年間にわたって指揮者を務めた。

2004年12月9日、ロンドン、バービカンホールにてイギリス室内管弦楽団を指揮し大成功を収め、海外メジャーデビューの第一歩を踏み出した。

現在、東京合唱協会指揮者、日本演奏連盟会員。

曲目解説

マスネ／管弦楽組曲第3番『劇的風景』

ジュール・マスネ (1842-1912) は『タイス』など多数のオペラで知られるフランスの作曲家であるが、1865年の管弦楽組曲第1番を皮切りに、青年時代に集中的に管弦楽組曲を書いていた。この管弦楽組曲には、第2番「ハンガリーの風景」から最後の第7番「アルザスの風景」まで、いずれも「〇〇の風景」という副題が付けられている。

第3番の「劇的風景」は1873年の作曲で、シェイクスピアの劇から着想を得て作曲されている。ただし、劇の内容に靈感を得て作曲した、というよりは、劇の特定の場面を音によって描写したものとされたほうが良い。管弦楽法の革命児でもあるヴァーグナーに若い頃から心酔し、また、音楽院の学生時代には生活費を稼ぐためにティンパニ奏者としてオーケストラで活動していたということもあって、マスネのオーケストレーションは秀逸である。

第1曲は『前奏曲と喜遊曲』。「あらし (テンペスト)」から題材をとっている。前奏曲は嵐にもまれる船が描かれている。鋭い音響で、次々と襲い掛かってくる波が見事に描写される。最後はフル・オーケストラの強音で、主人公が住む孤島に船が打ち上げられる場面が表現される。後半の喜遊曲では空気の妖精・エーリアルの活躍が描かれる。船に乗っていたのは主人公のかつての政敵。主人公の下僕エーリアルは、様々に術を駆使して、上陸した政敵を苦しめる。神出鬼没で音楽とともに空気の中から現れ、何にでも姿を変えることができる妖精エーリアルの活躍が、「スケルツェンド (思い切りふざけて)」と表情指定された楽しい音楽で生き生きと描かれる。最後は、勤めを果たした功績で自由放免となったエーリアルが空気へと帰っていく情景がフルートの弱音で表現される。

第2曲の『メロドラマ』は「デスデモーナの眠り」と副題された美しい音楽。夫への愛を貫いて命を落とした「オセロー」の悲劇のヒロイン・デスデモーナを簡潔なオーケストレーションによって描く。静謐の中に、運命の過酷さを思わせる厳しい表情も見せる。

終曲の『終幕の情景』は「マクベス」から。冒頭の不気味な音楽は、雷鳴轟く荒野に魔女が登場するシーン。魔女たちはスコットランドの武将・マクベスに王位を篡奪するようにそそのかす。続く晴れやかな音楽は王宮での祝宴の光景。有能な武将であるマクベスはこの場で王の賞賛を受けるが、魔女の誘いに乗って王や友人を暗殺し、王位を奪ってしまう。しかしマクベスは、殺したはずの友人が亡霊となって宴席に現れるのを見て錯乱する。亡霊は低弦と3本のトロンボーンで表現されるが、亡霊など人間を越えた霊的な存在を表現するのにトロンボーンは最適な楽器である (ちなみに、本日の後半プログラムであるトゥビンの叙情交響曲では、同じ3本のトロンボーンを極めて神聖な楽器として扱っている。マスネもトゥビンも、人智を越えた存在の象徴というトロンボーンの性格を見事に生かしている)。結局マクベスは、先王の家臣たちとの戦いに敗れて斬首され、先王の息子がスコットランド王位に就く。新王の戴冠式が、トランペットを倍加した壮麗なオーケストラによって描かれる。メンデルスゾーン『スコットランド交響曲』のフィナーレと同様、バグパイプの吹奏を思わせるような堂々たる終結である。

(Tp. 遠藤 啓輔)

ヴァーグナー／ジークフリート牧歌

今年 1 月、クナッパーツブッシュ(*1)指揮／ウィーンフィルによるリヒャルト・ヴァーグナー(*2) (Wilhelm Richard Wagner) のジークフリート牧歌がDVD化されて発売され、話題になっていたようである。JEUGIA 三条本店のクラシック売り場では、延々その映像が流れていたのが食傷気味という方もおられるかもしれないが、その点をご容赦願いたい。

曲は、1870年12月25日に妻コジマの誕生日プレゼント(*3)として演奏された。クリスマスの朝、まだ眠っているコジマの部屋へ続く階段で静かに演奏が始まったと言われている(*4)。総勢 15~16 人の演奏者で演奏され、コジマとその子供たち(*5)が目覚めた後も何度も演奏されたようである。後に、1871年12月20日にマンハイムにて私的な演奏会で演奏されているが、その際にヴァーグナーは第1ヴァイオリン6~8、第2ヴァイオリン7~8、ヴィオラ4、チェロ4、コントラバス2~3 という編成を要求している。本日の演奏は、およそこの編成に近い形にした。

当時作曲中であった、楽劇「ジークフリート」からのライトモチーフ(*6)を随所に用いているが、オペラそのものとはあまり関係ない。演奏者と興味ある方だけ知っていれば良い。ジークフリート牧歌では、代表的などろどろしたオペラとはまた違ったヴァーグナーの表情が見えるので、純粋にそれを楽しんでいただけたらと思う。

(Vn.西村 浩輔)

*1: クナッパーツブッシュは、ジークフリート牧歌の初演奏時に中心になっていたハンス・リヒターの弟子である。

*2: リヒャルトはドイツ語読み、ワーグナーは英語読み。日本では、何故かこの混在した表記が流通してしまっている。

*3: コジマの誕生日は、正確には12月24日。

*4: 階段はらせん階段では無く、普通の階段。奏者が並べる程なのかは疑問。

*5: 3人目にして、やっと長男が生まれたのがこの頃。ヴァーグナーは、その時に作っていた楽劇の主人公／ジークフリートの名前を息子につけた。ちなみに、ジークフリート牧歌は最初、「フィーディーの鳥の歌とオレンジの日の出を持ったトリープシェン牧歌」と名づけられていた。フィーディー＝ジークフリートの愛称。トリープシェンはヴァーグナーの別荘があった場所。

*6: オペラの場面に合わせて使いまわされる短い旋律。

トゥビン／『叙情交響曲』(交響曲第4番)

今日からちょうど10年前の1995年6月5日、僕はこの日を特別な興奮を持って迎えた。我々シベリウス愛好者にとって神の如き存在である名指揮者ネーメ・ヤルヴィが大阪フィルに客演してシベリウスを演奏したのだ。しかし、この演奏会でシベリウスに勝るとも劣らない強烈な印象を受けたのは、前半に演奏されたトゥビンの『叙情交響曲』だった。北欧音楽らしい清涼な響きの背後に隠された熱い感情のほとばしり。熱情を氷付けにしたかのようなこの異様な音楽を聴いた時の興奮は、白熊のような巨体で指揮台上を跳び回る巨匠ヤルヴィの豪快な指揮ぶりと相まって、今でも忘れることができない。それ以来、トゥビンは僕にとって愛する作曲家の一人となった。

エドゥアルド・トゥビン、1905年生まれ。凶らずも今年は生誕100周年に当たる。彼の故郷・エス

の『叙情交響曲』にまさるトロンボーンの使用方をした曲を僕は他に知らない。加えて、フルートとトロンボーンという取り合わせは、さらに別の連想を呼び起こす。フルートは少年トゥビンが独学で習得したほど熟中した楽器であり、また、トロンボーンはトゥビンの父親が吹いていた楽器である。それを考えると、フルートとトロンボーンの対話は、悲嘆にくれる作曲者とそれを励ます父親のようにも思われる。いずれにしても、救いを求める作曲者の弱さが包み隠さず表現された、まるで自画像のような楽章と言えよう。まさしく叙情的である。

この楽章の最後はヴァイオリン・ソロの独壇場となるが、これに関連して僕が重要だと思っているのは最後のハープの一打ちだ。ヴァイオリン・ソロが終わるとオーケストラは単純なドミソの和音に落ち着いて平静な世界を取り戻すが、まるで冷や水を浴びせるかのようにハープが不協和なレとラの音を打ち込んで楽章が終わるのである。ヴァイオリン・ソロは超絶的な高音域で弾かれるが、その張り詰めた音色は、マーラーの第4交響曲やサン・サーンス『死の舞踏』のヴァイオリン・ソロと同様、死神が弾くヴァイオリンを連想させる（マーラー4番のヴァイオリン・ソロは、作曲者自ら「あたかも死神が弾いているかのよう」な音色を求めている）。まるで、死神がヴァイオリンを弾きながら「さあおいで、楽になるよ」と甘い声で誘惑しているように思われるのだ。そうした死への誘惑から目覚めさせるかのようにハープが打ち込まれるのである。——前半楽章で戦争という人類最大の愚行が赤裸々に描かれ、第3楽章の前半では内省するように神との対話がなされる。それに疲れ果てて、一瞬、死んで楽になりたいという誘惑に駆られるが、ハープの一打ちで目覚めてその誘惑を断ち切る——まったくの僕の憶測に過ぎないのだが、そのようなストーリーを持っているように思われてならない。

この死への誘惑に打ち勝ったあとで迎える**第4楽章**は、堂々とした祝祭的な楽章である。たとえ行く先が苦難の道だとわかっているとしても、そこを突き進んで生きていく決意をしたことを、自ら祝福しているかのようだ。前半楽章で何度も繰り返された警告の主題が、この終楽章では力強い第2主題へと変貌し、さらにコーダでは輝かしいファンファーレに姿を変える。この光に満ちたフィナーレは、人類の未来への希望を、これ以上考えられないほど見事に表現した音楽といえる。

この『叙情交響曲』の初演の準備をしていた1944年の3月、ソ連空軍がエストニアを空爆。この曲の総譜は焼け焦げた。しかし、奇跡的に残ったパート譜から『叙情交響曲』は不死鳥のようによみがえり、空爆のわずか一月後、焼け残った劇場で初演される。このあまりにも劇的な復活譚は、この曲の終楽章に込められた未来を信じる思いが奇跡を呼んだとしか言いようがない。

同年9月、ソ連軍が本格的にエストニアに侵攻したため、トゥビンは亡命を余儀なくされる。この曲は囚らざるも故郷への惜別の歌となった。そして、トゥビンは晩年の1978年に亡命先のスウェーデンでこの曲をさらに改訂、同郷のネーメ・ヤルヴィの指揮で再演する。作曲者にとって、この『叙情交響曲』は希望の灯火であり、生涯こだわり続けるべき作品だったのであろう。

トゥビンが戦争による惨禍と人々の叫びを実際に目にし耳にしたであろうことを思い、それでも決して絶望することなくフィナーレで人類の輝ける未来を歌い上げたことを思うと、このトゥビンの前向きな創作意欲に勇気付けられずにはいられない。そして、その未来への希望を託された作品である『叙情交響曲』が戦火の中も焼失することなく残り、今こうして我々が聴くことができるという奇跡は、我々人類に輝ける未来があることの予言であり、何があっても決して絶望してはならないという力強いメッセージのように思われる。

(曲目推薦者：Tp. 遠藤 啓輔)



京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

村上 治子様	松村 正人様	小林 香様	福山 淑子様	村田 紀子様
川野 浩之様	南方 一晃様	杉本 幸子様	倉田 八重子様	三木 敏弘様
岩佐 聖子様	津田 篤太郎様	大原 達也様	井谷 宏美様	岡本 幸雄様
田中 直子様	越後 千代様	山本 保子様	鎗本 和弘様	
村山 義尚様	渡辺 一真様	安藤 美知穂様	福田 千恵子様	ほか 9 名様
村山 明日香様	渡辺 由加理様	稲村 董雄様	谷口 佳隆様	
渡辺 真人様	渡辺 晴菜様	遠藤 時金様	船橋 恭子様	
渡辺 和美様	河上 由香里様	瀬川 伸様	竹本 真理子様	
松村 里香様	井ノ山 敏江様	奈倉 道和様	高橋 順子様	

2002年4月に発足しました「友の会」は、上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(2005年4月現在)



平成15年酒造年度 全国新酒鑑評会 金賞受賞蔵

金賞受賞酒

純米大吟醸 一吟

英勲の酒造りに対する情熱と最高の技で作りに上げた究極のお酒です。全量酒造好適米「山田錦」を使用し、極限までに磨き上げ、淡麗さとデリシャスな吟醸香が優雅さを引き出した純米大吟醸酒です。

各木箱入り・税別価格

1.8L 詰 10,000 円 720ml 詰 5,000 円



酒の芸術



全国新酒鑑評会 7年連続金賞受賞

〒612-8207 京都市伏見区横大路三栖山城屋敷町7番地

齊藤酒造株式会社

<http://www.eikun.com/>

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeister

天澤 天二郎
(Massenet, Tubin)
西村 祐司
(Wagner)

Violine

天澤 天二郎
越後 美和
岡島 裕香
小幡 拓也
川島 仁子
佐多 久美子
千熊 由紀子
西村 浩輔
西村 祐司
水野 紗綾
横山 考太郎
渡邊 達之輔
荒巻 美沙子※
飯田 俊也※
磯貝 碧里※
大浦 一馬※
膳 ルミ子※
笹井 かつら※
須田 謙史※
谷口 絵美※
津田 卓郎※
中川 雅登※
廣保 翔※

Bratsche

大八木 文人
相澤 悠※
老川 幸夫※
折原 貴道※
富森 麻有※
田中 ふみ※
武藤 礼※
森 静香※

Violoncell

多田 進
小野田 税※
木坂 有男※
高矢 寿光※
土井 裕介※
星 衛※
宮崎 裕生※
矢野 卓也※

Kontrabaß

石橋 遼※
関 大輔※
鳥山 拓※
橋本 恵子※
光田 香住※

Flöte

江藤 佳美
加藤 勇仁
小松 朋美

Oboe

山出 涼子
石原 才子※

Englischhorn

安原 由香梨※

Klarinette

上高原 千寿子
萩原 潤
(Baßklarinette)

馬屋原 隆広

Fagott

林 直樹※
山下 奈美子※

Horn

芦原 俊平
片山 真吾
坂口 裕志
長岡 武志
吉野 文彦

Trompete

遠藤 啓輔
竹内 恵理
中西 美智子
山口 鮎美※

Posaune

益田 繁幸
山下 大介
尾崎 宙志※

Tuba

塚田 淳一

Pauken

永野 貴子

Schlagzeug

西村 浩
宮下 直子※
安岡 祐子※

Harfe

神前 千草※

※印：客演奏者

顧問

和田 之宏

団長

長岡 武志

事務局長

西村 浩

弦トレーナー 吉野 美穂
京都市立芸大卒。ヴァイオリンを木村直子、
岸辺百百雄、室内楽を種田直之、河野文昭、
久合田緑の各氏に師事。

管トレーナー 山崎 雅夫
京都大卒。京都大学交響楽団金管トレーナー。
トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M.
アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪ 第18回定期演奏会 ♪

2005年12月25日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館
カントレーブ/『オーベルニュの歌』より「オイ、アヤイ」「カッコウ」「バイレロ」
「3つのブルーレ」「女房もちわかひそう」 ソプラノ：好本 由希子
ロット/交響曲第1番ホ長調(関西初演) 指揮：金正奉

♪ 新入団員随時募集中 ♪

募集パート：ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス、
オーボエ・ファゴット・ホルン・打楽器

※管・打楽器はオーディションがあります。

※コントラバスは団所有の楽器があるため、楽器に関しては相談に応じます。

詳しくはお問合せください。

Tel：090-8163-4626(専用携帯電話 担当・竹内) E-mail：recruit@kyotophilolo.com

♪ 「友の会」会員随時募集中 ♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】1口 1,000円 【期間】ご入会いただいた月より1年間

【特典】1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ

Tel&Fax 075-605-0123(西村) E-mail：tomo@kyotophilolo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <http://www.kyotophilolo.com/>

クラシック音楽の海外公演・国際交流

海外での公演・国際交流は、現地でのマネジメントが大切です。

弊社は日本のオーケストラの海外公演・国際交流を、真の意味で成功させて参りました。

海外公演・国際交流のお手伝いはおまかせください。

最近の海外公演実績

岡山県桃太郎少年合唱団ドイツ公演98年8月(レーゲンスブルク大聖堂他)

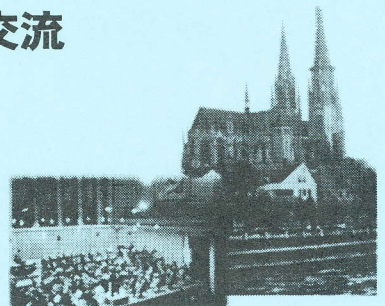
京都市民管弦楽団ヨーロッパ公演99年5月(ウィーン・ムジックフェライン大ホール他)

彦根市ベルリン第九演奏会実行委員会99年12月31日(ベルリン・SFB放送大ホール)

ルーマニア トゥルグ・ムレシュ パッサ生誕200年記念コンサート2000年5月(文化宮殿)

同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2001年3月(グラーツ・ステファニーザール 他)

同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2004年3月(プラハ・ドヴォルザークホール)



ホームページ：<http://www.mitsuma.com/>

協力会社：ルフトハンザドイツ航空会社、全日空、JTB、近畿日本ツーリスト、AIU保険会社

(社)日本クラシック音楽事業協会会員

(株)ミツマ・ミュージックプロダクツ

〒605-0009 京都市東山区三条通大橋東入ル大橋町102 田中ビル5F Tel.075-761-1213 Fax.075-752-5568